

2024

福井工業高等専門学校留学生だより

第13号



あみいくす



NATIONAL INSTITUTE OF TECHNOLOGY (KOSEN), FUKUI COLLEGE

目 次

福井高専の国際交流活動.....	校 長	長谷川 章	1
[教職員]			
留学した後の果実.....	教務主事	藤田 克志	3
留学生との一年間を終えて.....	留学生主任	相場 大佑	5
留学生のおかげで知ることができたこと.....	寮務主事	斉藤 徹	7
Don't forget your first resolution.....	学生主事	吉田 雅穂	8
英語が話せない人の海外旅行.....	留学生指導教員	西城 理志	9
分断と縁.....	留学生指導教員	西 仁司	10
留学生の印象.....	留学生指導教員	樋口 直也	11
インバウンド供給.....	留学生指導教員	村中 貴幸	12
留学生との交流を通じて.....	留学生指導教員	堀井 直宏	13
YOUは何しに福井高専へ?.....	留学生指導教員	古谷 昌大	14
異文化の交流から広がる世界.....	留学生指導教員	高橋 奨	15
たくさん仲間を作ってください.....	留学生指導教員	高久 有一	16
アミラさんを迎えて.....	留学生指導教員	高山 勝己	17
海外を身近な存在にするには.....	留学生指導教員	蓑輪 圭祐	18
経験から得たもの.....	学生課長	田中 賢一	20
[チューター]			
自身のチューターを振り返って.....	電気電子工学科5年	竹口 楓賀	21
留学生チューターになって.....	電子情報工学科5年	☒ 大知	21
留学生のチューターを務めて.....	機械工学科4年	加固 泰志	23
チューターとしての楽しい日々.....	電子情報工学科4年	古川 大希	23
僕の友達.....	機械工学科3年	木谷 旺揮	24
チューターになって.....	電子情報工学科3年	三村 龍輝	25
言葉を越えたつながり.....	物質工学科3年	小山 凜	25
チューターになって.....	環境都市工学科3年	角野 椿	26
[外国人留学生]			
人生の4%.....	電気電子工学科5年	カビン リン チュン ホン	27
ラオスと日本の文化の違い.....	電子情報工学科5年	テプ カイン タヌサイ	28
時間はあっという間に過ぎてしまう.....	環境都市工学科5年	コンスリ ウィリヤー	29
私の留学ストーリー.....	機械工学科4年	チャン デイン カイ	29
あみいくす - 経験を編む.....	電子情報工学科4年	ナツアグド'ルジ' プヤンピグ	31
日本で見つけた自分.....	物質工学科4年	ラジエセリ シグ アクマソ	31
高専での生活と成長.....	機械工学科3年	ムハマト' アリム ムイミン ビン サム	32
高専の印象.....	電子情報工学科3年	イェ エケル ベルムロ	33
日本に来たばかりの不安と素晴らしい仲間たち.....	物質工学科3年	ヌル アミラ ナジ ユロ ビンティ ムハマト' ヌフイク	33
2024年の生活.....	環境都市工学科3年	ガンソフ ナントヤ	34
[資料集]			
2024年度外国人留学生名簿.....			36
2024年度外国人留学生チューター.....			36
2024年度外国人留学生担当教員.....			36
外国人留学生卒業生(修了者)名簿.....			37

タイトルの『あみいくす』(amicus)とは、ラテン語で「友達」を意味します。

福井高専の国際交流活動

校長 長谷川 章

福井高専には、現在10名の留学生が在籍しており、日本人学生とともに学びながら日々成長を遂げております。本校に在籍する留学生から日本人学生の皆さんも多く、多くの事を学び取ることができます。留学生との交流による異文化理解は、日本に居ながらにして最も簡単に行うことができる国際交流活動と言えます。まったく異なる文化や宗教など多様な背景を持つ留学生との交流は、単に他国の文化や習慣を知るだけでなく、相互理解と尊重を深めるための重要な手段と言えます。本校では、チューター制度によって留学生のサポートを行っておりますが、日常的な留学生の会話から多くの事柄を学ぶ事ができます。学生の皆さんにはチューター活動のみならず留学生との日常的な交流を続けていただきたいと思います。

さて、北陸新幹線が本県に延伸された今、国際交流活動は、地域の魅力や技術を世界に発信する上で、ますます重要となって参りました。本県は恐竜博物館や永平寺、東尋坊そして一乗谷朝倉氏遺跡など観光資源にも恵まれ、伝統工芸品や食文化なども魅力的な土地柄です。また、福井県産のコメや日本酒は、その品質の高さから海外市場でも高い人気があります。

さらに、本県は、電子デバイスや、化学、繊維、電気機械などを中心とした工業も盛んな地域であり、中でも鯖江市を中心とした地域の眼鏡産業は、国内シェアの95%を占めており、多くの海外ブランドとの協力関係を築いています。その他にも伝統工芸品である越前和紙や越前漆器も、国際的な展示会で高い評価を受けており、これらの産業は、福井県の経済を支えるだけでなく、地域の文化を世界に発信する上でも大きな役割を果たしています。

このような魅力的な地域における高等教育機関の一つとして本校では、コロナ禍で中断していた国際交流活動を、コロナ以前にも増した形で再開させております。昨年度は、ベトナムにおける海外企業でのインターシップへ専攻科学生3名を派遣、シンガポール海外研修ではナンヤンポリテクニクの学生との文化交流や企業訪問に22名、重慶理工大学での現地学生と研究発表会などの交流活動に5名、台湾科技大学を含む台湾研修に5名の学生を派遣しております。その他、トビタテ！留学JAPAN高校生コースで、米国シリコンバレーにて1か月間の研修に1名が参加、古岡奨学金に採択された学生1名が、カナダのバンクーバーアイランド大学付属高校での研修に参加するなど数多くの学生が海外経験を経て、大きく成長しております。さらに昨年9月には、タイ王国プリンスオブソンクラ大学と国際交流協定に関する覚書が締結され、学生の相互留学の機会が拡大されるなど、国際交流環境がますます充実して参りました。今後、近隣諸国を中心に協定校を増やし、学生の皆さんが異文化理解を深めるためのプログラムに参加し、グローバルな視野を養っていく環境を整えていきたいと考えています。

本校では、国際交流活動を通じて国際社会で活躍できるグローバルエンジニアの育成を目指した教育活動を行っております。海を越えて日本を訪れる外国人留学生の皆さんにも、これか

ら海外を目指す日本の学生の皆さんにも、母国では得られない体験を通じ国際的な感覚を身に付けていただきたいと思います。願っております。



令和6年度外国人留学生との懇談会 (2024.12.13)

[教職員]

留学した後の果実

教務主事 藤田 克志

「留学」というある意味人生の中でも特別な経験は、その人の人生にどのような影響を及ぼすのでしょうか。「留学」の人生への意味を考えたとき、その答えが出るのはどのようなタイミングなのでしょう。

昨年の6月に岩波文庫から『遠藤周作短篇集』が出ました。12篇の短篇小説と3篇のエッセイを集めた遠藤周作のアンソロジーで、初期のものから中期のものまでが入っています。この中に「学生」という短篇もあって、これは、遠藤周作自身1950年、27歳のときに戦後最初のカトリック留学生としてフランスに渡った経験を元に書かれたものです。ただし、小説は、語り手の「私」が経験した留学に天正少年使節の「留学」を重ね合わせる構造になっています。

天正少年使節は、1582年にキリシタン大名の大友宗麟、大村純忠、有馬晴信らの名代として4名の少年がローマに派遣されました。4名の少年の名は、伊東マンショ、千々岩ミゲル、中浦ジュリアン、原マルチノ。マカオを経てゴアに到着したのが1583年12月。1584年8月にはポルトガルのリスボンに到着。翌年の3月にはイタリアに入り、ピサ、フィレンツェ、ローマ、アッシジを訪問しています。ローマではローマ教皇に謁見を許され、ローマ市民権を与えられたということです。1586年に帰国の途につくのですが、その年の7月に秀吉によるバテレン追放令が出てゴアで足止めとなります。それでも1590年長崎に到着します。使節団は、活版印刷機や西洋楽器、海図などを持ち帰ったといわれています。その後の少年4名の運命。伊東マンショは、司祭となり1612年に長崎で死去しています。千々岩ミゲルは、棄教をしています。中浦ジュリアンは、1633年長崎で殉教しています。原マルチノは、日本を追放され1629年マカオで死去しています。「留学後」のいずれの人生も、波乱万丈であるといえるでしょう。

「学生」では、東京から語り手である私と同じ大学生の杉野、大阪から大学の工学部を出ている田島、名古屋から海兵あがりの粕谷の4名が「留学生」であり、4名が乗り込んだのはフランス船の四等で、それは船荷を入れる船倉であったため、粕谷以外は船酔いになり、4名は早速仲間割れをします。敗戦国の留学生であるための差別も船の中で経験します。マルセイユに着いて、すぐに粕谷はストラスブルグに、杉野はグルノーブルに、田島はボルドオに、私はリヨンに行くことになり、バラバラに生活することになります。留學生活の途中で、私はリヨンからグルノーブルに杉野に会いに行きます。彼は段々教会に行かなくなったといいます。粕谷は聖地ルルドの学生巡礼団に混じってリヨンの私を訪問してきます。「一緒に祈りませんか」と誘われても私はそれに応じませんでした。ボルドオのカルメル会の修院にいる田島を私は夏休みに訪ねます。面会が禁止されているため、田島が畑仕事をしている合間に会うこととなります。私が帰国するとき（遠藤周作は2年半ほどフランスにいたのですが）、カトリック留学

生としての援助を断ってパリにいる杉野を訪ね、田島や粕谷とは連絡が取れず、一人で帰国します。田島は結核を患った後、死亡し、粕谷の消息は全くない、ということで小説は終わっています。

遠藤周作が留学から帰って来たその年に、母の郁が亡くなっており、キリストの存在と母の存在を重ねるような小説を書くと言明して、小説を書き始めたといいます。そのため、遠藤周作の小説は、『沈黙』のようにキリストの存在を求めたものが代表作といえるでしょう。フランス留学の中で日本人としてキリスト教作家としての立ち位置を様々に思考し、1969年に書かれた「学生」はそのひとつの答えなのでしょう。ある果実を実らせたのではないのでしょうか。「留学」に対する答えが出るのは、帰国して16年後であることもあるのです。



令和6年度チューター委嘱式 (2024.4.5)

留学生との一年間を終えて

留学生主任 相場 大佑

現在、福井高専には3年生4名、4年生3名、5年生3名の合計10名の留学生が在籍しています。私は留学生のみを対象とした基礎数学の授業を何回か担当したことがありますが、分からないことがあれば積極的に質問するなど、皆とても真面目で、勉強熱心な努力家が多いと思います。

また、それぞれの出身国や年齢など全く関係なく、留学生同士の仲が非常にいいようにも思います。これまでは授業でしか留学生との接点がなく、普段の様子はあまり分かりませんでした。留学生研修旅行や留学生との懇談会などいくつかのイベントを見ていると、お互いに仲が良く協力し合っている様子が分かりました。留学生自身も「私たちはみんな仲がいいです」と言っていました。これからもお互いに協力し合って学生生活を送ってもらいたいと思います。

さて、話は変わりますが、1月末、東京都新宿区にある日本学生支援機構（JASSO）東京日本語教育センターで、4月から本校に編入学する留学生1名と面会してきました。この東京日本語教育センターでは、日本の大学院・大学・高専の高等教育機関へ進学を希望する外国人留学生を対象に予備教育を行っています。余談ですが、この日本語教育センターは私が大学生の時に1人暮らしをしていた東中野の近所にあります。神田川のすぐそばにあり、外国人が多く生活する大久保から近いため、留学生にとって生活しやすい環境のようです。大学を卒業してからおよそ17年経っていますが、福井高専の留学生主任という形で再び東中野に行くことになるのは、人生何があるのか分からないものだと思います。

話を戻します。今回の全国の各高専へ編入学する留学生との面会は、新型コロナウイルスの影響で数年間中止になっていましたが、今年度から再開になりました。

当日は面会の他に、センターの職員の方から普段の授業内容や寮の案内があり、日本語授業の見学もありました。この日本語の授業は、見学というより参加型で、私も参加させていただきました。私が参加したのは4人グループで、この4人は福井・長野・津山・旭川の各高専へ編入学することが決まっております。学科もそれぞれ異なりました。まず留学生とお互いに自己紹介を行って、次に、与えられた日本語の文章に関してグループディスカッションを行いました。恥ずかしながら、初対面の留学生とうまく話ができるかどうか不安な気持ちがありましたが、皆さん明るい性格で一生懸命に話や質問をしてくれたので盛り上がって助かりました。留学生の熱意はすさまじく、4人とも自分でやりたいことや夢を熱く語っていたので、ぜひ各高専での生活を通して夢を実現してもらいたいと願っています。

授業後は、福井高専へ編入学する留学生との個別面会を行いました。まだ緊張している様子でしたが、学校の紹介、今後のスケジュール、質問を受け付けて話をするうちに笑顔が見られるようになったので、少しは不安が解消できたのかなと思います。

この4月から新たに4人の留学生が福井高専の3年生へ編入学する予定です。現在在学している留学生含め、福井高専へ来ることができて良かったと思えるようにお互いに協力し合って学校生活を送り、社会で活躍するエンジニアになってもらいたと思います。



令和5年度鯖江市長訪問（2023.4.6）



令和6年度鯖江市長訪問（2024.4.7）

留学生のおかげで知ることができたこと

寮務主事 齊藤 徹

私自身の留学生との思い出だと、最初は大学の時になるでしょうか。私が所属していた研究室では、卒業研究も佳境を迎える12月になると、夜遅くまでの卒研の慰労ということで、中国からの留学生の人たちが水餃子を作り、私たち日本人はおでんを作ってお互いの冬の温かい食事での交流するのが定番でした。中国の留学生の人たちは、ニラたっぷり最初から手作りなので、研究室の同じフロア全部にニラの匂いが蔓延していたのを思い出します。そこで、はじめて焼き餃子が普通なのは日本だけというのを知りました。こういった「日本を再発見できる」という意味で異文化交流ができる留学生の人たちとの交流は、大切な体験です。

2つめの思い出は、高専の担任の中で留学生を迎え、「日本語」のアドバイスをするときでした。一番なにが困ったかという、留学生の日本語の教科書の問題がさっぱりわからないことです。基本的問題の穴埋めで助詞の「は」と「が」の使い分けを留学生の人に聞かれましたが、まるっきり説明できません。例句の説明が「ここはなんとなく『が』なんだよねー」、ってまるっきり説明になってませんでした。これだけ毎日日本語を使っているのに、「が」と「は」の説明すらできない…と情けなくなりました。最近よくみるYouTubeの動画でアメリカからの帰国子女の人が、日本人の友達に「英語」の質問されて「フィーリングでこーでしょ…」って説明をして「日本人に『こいつに英語話せるくせに役に立たねー』って呆れられた」という話をしていて、「あるある、だよねー」を連発しながら笑ってました。チューターの体験のない学生さんは、ぜひ「日本語検定」のテスト受けてみましょう。「フィーリングでこっち」は禁止です。

こういった経験を通して、留学生の人との交流の基本知識はあるつもりでしたが、今年寮務主事の仕事として、新しい留学生を迎え「お祈りの時間は季節で変わる…」ということを知ることができました。私の家は浄土真宗ですが、お経も「なむあみだぶつ…」以外、何をいってるのかさっぱり意味不明、クリスマスのケーキもたべるし、葬式はお寺さん、初詣は神社に参拝する典型的な日本人には、日々新しい発見です。

留学生の皆さんは、この私自身の経験の「真逆の立場での同じ経験」をされているかと思います。この異文化のギャップを埋めるにはコミュニケーションを続けるのが一番でしょう。ここで私の異文化対応レベルの低さをお披露目しました。私に日本語検定の質問しても無駄です。なので、代わりに「日本を理解するなら、どんなアニメが面白いですか？」というネタで雑談しましょう！日本語で!!

Don't forget your first resolution.

学生主事 吉田 雅穂

海に囲まれた日本は外国を海外、海の外と呼びます。アメリカやユーラシアの大陸のように隣国が陸続きであることと比べると、日本人が国外に行くことは、手段はもちろん、気持ち的にもハードルは高いですね。また、日本語という外国では一切使われない言語を話すことも障壁となっています。しかし、ハードルが高い故に、発展した先進国や途上国の未知の世界を見てみたいという願望が昔の人にはありました。しかし現代では、インターネットというインフラと、Google Earth のお陰で仮想世界旅行を瞬時に楽しむことができます。

飛行機を降りて入国審査を終え、ターミナルビルを出た時に、今まで経験したことのない、その国の色、音、温度、湿度、臭いに遭遇します。そこから街へ出ると、さらに、経験したことのない、景色、言葉、習慣、味に出会います。そしてその時、自分が異国から来た人間であることを強く意識するようになります。

私が初めて海外を旅したのは就職して間もない 22 歳の時。いわゆる旗を持ったガイドさんに付いていく旅でした。残念ながら記憶がありません。その 2 年後、インターネットのない時代、飛行機や宿を電話で予約し、地球の歩き方を片手に公共交通機関で移動するアメリカ 1 人旅をしました。美しい街の風景や落書きだらけの地下鉄での恐怖は今も鮮明です。記憶は自発的な行動によって脳に深く記録されます。

この文はコロナ禍前の 2018 年、私が国際交流室でお仕事をしている時に、海外渡航にあまり積極的ではない本校の学生さん向けに、「海の外へ！」という題目で寄稿した青武台だよりから一部引用した拙文です。本校の外国人留学生の皆さんは、既に海の外へを実践している前向き人間です。

福井高専が初めて留学生を受け入れたのは、今から 30 年以上前の 1991 年でした。その頃の私は寮務主事補を務めていて、留学生受入のための規則作りや施設整備のお手伝いをした記憶があります。マレーシアとタイからの計 3 名が卒業する時、日本での 3 年間の感想についてこう述べました。「福井高専で勉強の仕方を学ぶことができました。」

現在の外国人留学生の皆さんは、どのような志を持って母国を旅立ち今に至っているのでしょうか。日本の諺「初心忘るべからず」は、「Don't forget your first resolution.」と訳されるそうです。本校での日々の経験を糧に、今後もさらに、前向きに取り組んでくれることを望みます。

英語が話せない人の海外旅行

留学生指導教員 西城 理志

私は電気電子工学科の担任として、マレーシアからの留学生 CALVIN LING CHUNG HUNG (以下、カルビン) 君を3年間担当させてもらった。彼に関して語るならば、私は褒めることしかできない。彼は非常に聡明な学生で、コロナ禍が残るなか、3年次に訪日出来ていない彼とビデオ通話で話したときに、日本語のうまさや、理解能力に感嘆したことを覚えている。数ヶ月遅れでクラスに合流した後も、非常に優秀な成績を修めてくれた。成績優秀、4ヶ国語を話せ、高専祭やその他の国際関連イベントで活躍し、人間性にも優れ高い視座と野心を持つ、非の打ち所がない学生だと私は感じる。その彼もインターンシップや進路などがすべて思うままかというところでもなかった。それが私の指導力の問題なのか、私に見えていない問題なのか、あるいは先方の見る目のなさの問題なのか、結局は分からないままである。学生指導は難しい。とはいえ、彼が国際人材として将来活躍することは、間違いないと私は確信している。

ここで終わると、ただの思い出話おじさんになってしまうので、少しでも読んだ人に役立つかもしれない海外旅行のコツでも書こうと思う。私は英語が全く得意ではないのだが(日常会話もできない)、十数カ国に旅行したことがある。そこで、英語が話せなくても旅行する手段を紹介しようと思う。その方法は日本で、宿泊先と移動手段をすべて事前手配しておくことである。国内旅行を思い返して欲しいのだが、皆さんは旅行するときに旅の仲間以外と発話する機会はあるだろうか? おそらくほとんどないのではないかと思う。問題が起きない限り、旅行をするのに話す必要はない。強いて言えばレストランの注文と会計くらいだ。つまり旅程さえ立っていれば、英語など話せなくても良いのだ。そして異国に行くときの注意は、ガイドブックを事前に読み込むことである。例えば地球の歩き方というガイドブックを買い、カラフルな観光地情報には目もくれず、後ろの旅の注意や社会システムの部分を読み込むのだ。特に交通手段などのチケットの買い方は必須である。それさえ出来れば、ある程度の旅行はなんとかなるだろう。特に最近は、インターネットで大抵の予約は出来てしまうありがたい世の中だ。これでクリアできない問題は、飛行機が飛ばない、電車が予定通りに動かないなどなので、これが起きたら頑張るしかない……これに関しても事前に対策をしておく方が良いかもしれない。インターネット使い放題の設定と、コンセントの接続端子の準備も忘れないように。旅行先の食べものは調べておくと、旅行が豊かになる。

国際交流の一番の魅力は、普段意識しない自分自身の考え方の基底に気付かされることだと思う。高専において日本語が達者な留学生と関わる機会の多かった皆さんは、非常に幸運である。物事を深く考える上でパラダイム転換は必須であり、それには異なる価値観の受容が最も重要である。是非これからも、国際交流を続けてほしい。

分断と縁

留学生指導教員 西 仁司

私は本校の卒業生ですが、学生時代のクラスにはベトナムからの留学生がいました。彼は優秀で、本校卒業後に大学に進学し、IT関係の日本企業に就職しました。その後独立して、ベトナムでソフトウェアの会社を起業しました。私は彼とのコネクションを活かして、2023年度に専攻科の海外インターンシップ生の受入れをその会社をお願いしたところ、快諾してもらえました。インターンシップ開始の時には、学生と一緒にその企業を訪問して同級生にお礼し、いろいろな意見交換もできました。これ以外でも、学会や研修でベトナムに行く機会があり、当地には不思議な縁を感じます。

私の大学時代の研究室には、中国人の留学生が2、3人いました。みんな日本語が堪能で、研究室の親睦会でもいろいろな話をしました。

今回のクラス担任では、ラオスからの留学生のイッキュー君を担当しました。彼のお父さんも日本にゆかりがあるということで、ニックネームの「イッキュー」は、日本の一休さんからきているそうです。その名の通り、彼は非常にユーモラスな学生です。機会があれば、彼の母国のラオスを案内してもらいたいものです。

このように、私は海外の人と一緒に勉強したり、研究したりする機会に恵まれました。

一方で世界はというと、1月に就任したアメリカ合衆国のトランプ大統領は、アメリカ第一主義を掲げて、同盟国であっても自国のための要求を突きつけると言っています。中東情勢、ウクライナ情勢などでも、和平の道筋は見えてきません。簡単な話ではなことは分かっていますが、分断が広がるのは悲しいことです。

その中で、クラスや寮で一緒に勉強している留学生の存在は大きいと感じます。留学生と生活してみると、文化や考え方が異なることは事実として受け入れつつ、それを乗り越えられる方法があることがわかります。20歳という年齢でそれを感じることは、その後のその人の国際感覚に大きな効果をもたらすはずで

です。日本以外で友人を訪ねていける土地があるということは、素晴らしいことです。留学生がクラスにいる学生の皆さん、あるいは寮生の皆さんは、ぜひそのつながりを大切にしてください。将来、その縁が自分を救うことになるかもしれませんよ。

留学生の印象

留学生指導教員 樋口 直也

ワインさんを留学生として迎えてから、早いものでもう3年が経とうとしています。環境都市工学科は、これまで留学生を迎える機会が少なく、ワインさんは本学科で8人目の留学生です。

私は指導教員になることが決まった際に、ふと学生時代の友人であるベトナムからの留学生とインドネシアからの留学生2人を思い出しました。2人とも母国語、英語を話せ、発想が豊かですごく優秀な学生でした。ただ、日本特有の考え方や日本語を理解するのに苦労していたため身振り手振りで説明した記憶が思い浮かびます。いまでも2人とは連絡を取り合っており、ベトナムからの留学生は、日本に就職し、タイ王国で働いている方と結婚をしたと報告され「グローバルだなあ」と思った記憶があります。もう1人は、インドネシアの大学で教員となっており、学会等で会い近況を話し合うなどしております。インドネシアにて地震があった際にも援助物資を送りお互い助け合っております。2人ともかけがえのない友人です。

ワインさんもこれからさき日本特有の考え方や日本語、自分の将来について色々悩むことがあると思います。いつでも相談してください。身振り手振りを交えながらアドバイスをしたいと思います。

3年間おつかれさまでした。これから進学、就職と続きますが頑張ってください。応援しています。



令和4年度越前市長訪問 (2022.6.20)

インバウンド供給

留学生指導教員 村中 貴幸

3年ごとに発行されるこの留学生だより「あみいくす」. 3年生のクラスに入学してくる留学生を受け持つと卒業までの間に1回は原稿執筆が回ってきます. なんとも上手く考えられた発行間隔です. 今回の原稿執筆では担当する現在4年生の留学生を紹介したいと思います. 約2年前, 令和5年4月からマレーシア人留学生のディンカイ君と関わることになりました. 初めて会ったディンカイ君は, どこか不安げで, 緊張した顔をしていました. 指導教員としても勉強についていけるのか? 日ごろの生活に馴染めるのか? といろいろ心配でした. 頼むぞ, チューター! と祈りにも近い心境でした. ですが, いざ新学期が始まってみると前期末の成績はクラス1位, TOEICは900点オーバー. いきなりスーパーエースが誕生してしまいました. 何をやっているんだ, 日本人学生! と, 違う心配事が増えました.

コロナ禍が明けて, ドッと外国人観光客が入ってきて「インバウンド需要」という言葉をよく耳にします. インバウンド需要の正しい意味は違うかもしれませんが, 私なりの解釈として, 外国人旅行者の方たちがお土産や食事に外貨を使ってくれて地域経済が潤うことと理解しています. 円安で海外からの旅行がしやすいことが要因だと思いますが, 自然豊かな環境や日本人の“おもてなし”に代表される人柄やサービス精神も理由ではないでしょうか? 行動派のディンカイ君はこの2年間で富士山に登り, 北海道旅行にも行きました. まさにインバウンド需要に貢献中です. 一方, クラスでのディンカイ君は, “ディンディン”の愛称で呼ばれ, 勉強を教える講師役, 言うなればインバウンド“供給”者になっています. 私のクラスでは需要と供給が逆転し, 日本人学生がサービスを受けている状態なのです. 大丈夫か? 日本人学生!

4月からの新年度, いよいよ進路決定の時期です. 進学を希望するディンカイ君, 志望校への合格が叶うことを心から祈っています. と同時に, インバウンド供給者としての資質や人柄をどんどん磨いてください. クラスでの講師役, よろしくお願いします. 日本でのインバウンド供給者としての経験が, これからの人生を豊かにしてくれると思います. 余談ですが, 今年の秋に行った遠足ではクラス全員で文殊山に登りました. ディンカイ君は富士山登山に自信を付けたのか? 揚々と先頭を登っていましたね. 道を間違えて日本人学生たちと一緒に帰ってきたときは, 最初に会ったときと同じ, 不安そうな表情をしていて, 思わず笑ってしまいました.

留学生との交流を通じて

留学生指導教員 堀井 直宏

私が初めて、福井高専の留学生と縁ができたのは、本校に奉職して2年目に電子情報工学科に派遣されたマレーシア出身のモハメド・サラム君との出会이었다。本校の留学生受け入れの一期生だった彼は、本国でポリテクニク (Polytechnic) を卒業しており、更に日本語研修を受けてから来ていたので年齢的には学生よりも5つほど上であった。とても優秀でかつ性格もおだやかで、クラスの学生からもサラミーと呼ばれて慕われていたのを覚えている。当時、自分が卒研支援で担当していた沖村先生の研究室に配属となったこともあり、とりわけ深く交流することになった。

なによりも思い出すのは、彼は料理が上手で、マレーシアの料理をよくふるまってくれたことである。私たち日本人に合わせて少しマイルドにしてくれたそうなのだが、なかなかの辛さであったことから大汗をかきながら、とても美味しい食事を楽しんだ。その際に、最初はスプーンで食べていた私たちに、「スプーンではなく、私たちが普段食べているように手の指を使って食べるのを試してみませんか？そちらの方が美味しいですよ」と彼が提案してくれた。そこで、実際に指の使い方を習いながら、最初はうまく口に運べない様子を皆で大笑いしながら、見よう見まねで食べてみると、なるほど食材の混ざり具合が絶妙に変化して同じ料理であっても別の味わいが出ることを知ることができた。いっしょに食事を共にしながら文化と心の交流を大いに楽しめたことを昨日のこのように覚えている。

彼をはじめとして、その後も多くの留学生と縁を結ぶことができ、卒業後に近況の便りをもたらすのは最も嬉しいことのひとつである。つい最近では、卒研生だったヤンくんから、結婚と近況の報告をLINEで受け取り、本人の少しはにかみながら新婦と腕を組んで嬉しそうにしている写真に幸せのお裾分けをいただいた。

これからも多くの留学生と縁ができていくことは、私が仕事をしている上での大きなエネルギーとなっていくと思います。留学生のみなさん、これからも一緒に学び、文化を交換していきましょう。

YOUは何しに福井高専へ？

留学生指導教員 古谷 昌大

マレーシアからの留学生セリさんをクラス担任として迎えてから、早2年が経とうとしています。母国から遠い異国にやって来て、冬は寒くて、毎日日本語で授業を受けて大変だなあ…と最初は少し心配しながら見守っていました。しかし、今ではすっかり頼もしくなった印象です。昨年12月にあった留学生懇談会で、皆の前で、日本語でプレゼンしているのを見たとき、素晴らしい出来栄えでとても感心しました。日本語を読む・書く・話す・聞く。どれもレベルアップ著しいです。因みに、私は自他ともに認める早口で、しかもボソボソしゃべってしまいます。たまに「流ちょうな日本語ですね」と皮肉を言われます。気を付けてはいますが、なかなか直りません。セリさんとの日本語の授業でもその調子なのですが…もし私のしゃべっていることを常に正確に聞き取れるようになったら、日本語を聞く能力に関しては検定『超』一級レベルです(笑)。セリさん、がんばってついてきてくださいね。

セリさんは、物質工学科の生物工学コースに所属していて、専門性の高い様々な授業を受けています。また、休日には留学生の友人と色々な所に出掛けているようです。担任としては、福井高専での3年間で大いに学び、そして、異国日本での生活と文化経験を満喫してもらいたいです。

なぜなら、これらの知識や体験はすべて、将来セリさんが国際交流する際の有用なツールになると思うからです。たとえば、アミノ酸科学の分野で「A」と言えばそれは「アラニン」であり、たとえ言葉が通じなくても互いに理解できて「会話」は成立します。また、他人に何かしてもらったら感謝の気持ちを伝えるということは、マレーシアでも日本でも同じなのだということに気付くことができたなら、その瞬間、日本により親しみを持てるようになるでしょう。

英語が国際交流の代表的かつ重要なツールであることは、誰もが認めるところですが、実は他にも「世界共通語」があると個人的には思っています。生化学の記号や元素記号、化学構造式、反応式、物理の公式、数学の定理、論理、芸術、スポーツ、さらにはヒューマニティなど…研究者・技術者としての「世界共通語」がありますし、言葉では簡単に言い表せない類の「世界共通語」があると思うのです。学生時代はそれらを集中して学んだり経験したりするための時期だと思うので、やり切ったと思えるくらいに有意義に時間を過ごしてほしいです。高専で自由に、様々な「世界共通語」をカスタマイズして、自信を持って外の世界に踏み出していくことを願っています。

異文化の交流から広がる世界

留学生指導教員 高橋 奨

令和6年度に、機械工学科にマレーシアから留学生としてアリム君が来て、もうすぐ1年が経ちます。最初は、初めての担任ということもあり、不安な気持ちもありましたが、これまで2年間、寮務主事補として留学生と関わる機会があり、彼らの生活環境や生活リズムについて理解していたことは、留学生の担任として大いに役立ちました。アリム君自身も分からないことがあればすぐに相談してくれますし、どんなことにも前向きにチャレンジする姿勢を持っているので、とても助かっています。また、彼はいつも笑顔で話しかけてくれるので私もリラックスして会話を楽しむことができます。学外の留学生とも積極的に交流しているようで、休日にはさまざまな場所を訪れ、日本の歴史や文化を学ぶことを楽しんでいる話を聞き、安心しています。

印象に残っている思い出のひとつが、留学生との懇談会です。懇談会では、各国の留学生が自国の文化や特徴を紹介しました。自国の紹介の中で、マレーシアの国旗について説明してくれました。マレーシアの国旗は「Jalur Gemilang (栄光の縞)」と呼ばれ、赤と白のストライプ、青い四角、黄色の三日月と星がデザインされています。赤と白のストライプはマレーシアの州の団結を表し、青は国民の結束、黄色の三日月はイスラム教を象徴しています。星の14の角と14本の赤と白のストライプは、国を構成する13州と連邦政府を意味していて、国全体の統一を表しているそうです。彼らの説明を聞きながら、国旗にはそれぞれの国の歴史や文化が込められていることを改めて実感しました。日本の国旗「日の丸」はシンプルですが、日本の精神や文化を象徴しているように、どの国の国旗にも深い意味があることを学ぶことができました。

留学生がいることで、学生はもちろん、私たち教職員も異文化について学ぶ機会を得ることができます。これからも日本で充実した学生生活を送り、多くのことを学びながら成長してほしいと思います。

たくさん仲間を作ってください

留学生指導教員 高久 有一

多くの留学生の皆さまが、福井高専に来ていただき、大変感謝しています。

言葉も育った環境も違う君たちがいることで、日本で生まれ育った学生も成長します。私も、様々な国の留学生の担任を経験し、楽しませてもらっています。特に、各国の食事やお菓子は、美味しいものから苦手なものまで色々でした。

私は、小学生のころアメリカのサマーキャンプに2週間ほど参加したことがあります。日本から持っていったお菓子が大人気で、あっという間になくなったことを思い出します。山登り、キャンプファイヤー、アーチェリー、乗馬、キャンドル作り、プール、川遊びなど、現地の子供たちとずっと遊んでいたのですが、その経験のおかげでみんな仲間なんだと思えるようになったのでしょう。君たちも、日本でたくさんの仲間を作ってください。もちろん留学生同士の仲間もたくさん作ってください。私たちが、国を越えて助け合える仲間になれば、きっと世界は平和になります。

今更ですが、留学生へのアドバイスを ChatGPT さんに伺い、ちょっとだけアレンジしてまとめました。

- 1.積極的にコミュニケーションを取る
- 2.失敗を恐れない
- 3.お互いの文化を尊重する
- 4.困ったときは助けを求める
- 5.自分のペースを大切にする

これらは、留学生だけでなく、誰にとっても大事なことだと思います。

困難に直面することもあるかもしれませんが、それを乗り越える力が自分を強くし、次へのステップとなることを信じて、日々の生活を楽しんでください。

アミラさんを迎えて

留学生指導教員 高山 勝己

私が留学生を担当のクラスに迎えるのは、これが2回目になります。フルネームで発音するには難しいのでニックネームでアミラさんと呼ばせてもらっています。マレーシアからの政府派遣留学生であり、確か1回目に担当した留学生もマレーシアからでした。私の個人的な友人にもマレーシア人が数人いて、マレーシアには以前から親近感を持っていました。

4月初めの顔合わせの面談の折に、私はアミラさんに、これから始まる福井高専・物質工学科での5年間で、特に何を学びたいと思いますかと質問をしました。これに対するアミラさんの回答は“食品に関する専門を学び、関連の技術を習得して母国に帰りたいです”であったと記憶しています。確かな目的を持って留学を決意したのだと、強く感心させられた事を覚えています。

さて、ここ数年来、福井高専にも常に一定数の留学生が在籍するようになりました。モンゴル、マレーシア、タイ等のアジア地域が主ではありますが、それぞれの国の文化や習慣は、その国の人々の宗教と深く関係してくるので、コミュニケーションをとるためには、英会話ばかりではなく、宗教に関する知識が必要となります。

アミラさんの担任を拝命して、10 か月になりますが、この間で私が一番気を使ったのは、何とんでも11月の研修旅行でした。期間中の食事やお祈りの時間への配慮です。そして特に後半の自主研修旅行（自由行動期間）をどうか無事に終えて帰って来て欲しいという願いでした。幸い、私の心配は杞憂に終わり、アミラさんにとって楽しい思い出となったようで本当に良かったと思っています。

最後になりますが、アミラさんがやがて帰国する際に、日本（福井高専）に留学して、本当に良かったと思えるようなサポートができたらと思っています。

海外を身近な存在にするには

留学生指導教員 袁輪 圭祐

我々日本人は、島国であるという地理的要因が大きく影響しているからなのか、外国を遠い存在に感じている人が少なくありません。かくいう私もその 1 人（だと自身では思っているの）ですが、自身の生い立ちを振り返ると、意外と海外が身近だったりします。

父が韓国人である我が家では、私が幼少期の頃からビビンバやナムル、キムチ、チヂミなどがよく食卓に並んでいました。どれも祖母の自家製で、当時はそれらが韓国料理だという認識がないまま当たり前のように食べていました。祖母も父も他界した今となっては食べる機会がめっきり減ってしまいましたが、ふと懐かしく思って無性に食べたいことがあります。そういう時には市販品を食べたり韓国料理の店舗で食べたりしますが、やはり我が家で食べていたものが一番美味しいとその都度再認識させられています。様々な国の料理を気軽に味わうことができるようになった現代では、食文化という観点では海外は身近な存在になっているといえるのではないのでしょうか。日本食も大好きですが、これからも様々な国の料理を味わってみたいと思っています。

そんな私が初めて海外に行ったのは、19 歳（高専 4 年生）のときでした。高専と長岡技術科学大学との協働事業の一環で海外研修に参加させていただき、韓国に行きました。渡航先は韓国かベトナムの二択だったのですが、自分と縁のある国を選びました。このときの経験として強く印象に残っているのは、隣国だけれども日本と異なる部分が数多くあるということでした。「韓国では自動車は右側通行」なんてことは知識としてわかっているはずなのに、いざ実際に目の当たりにするとそれだけですごく新鮮でした。

一度経験してしまえば、次へのハードルはさほど大きく感じません。私が次に経験した海外は、スペインでの約半年間の生活でした。福井高専を卒業して長岡技術科学大学に進学した私は、長期インターンシップでカタルーニャ工科大学に留学し、現地の大学院生と一緒に研究活動（廃タイヤのゴムチップをコンクリート構造物やコンクリート舗装に利用する検討）することを選びました。唯一の誤算は、序盤でかなりのホームシックになったことですが、ガウディの建造物を巡ったり、スペイン国内の世界遺産を巡ったりなど、とても充実した時間を過ごすことができました。お世話になった大学の先生や大学院生と一緒に日本食（鉄板焼き）を食べに行ったことが一番の思い出になっています。

さて、私が現在担任を務めているクラスには、モンゴルからの留学生のナラーさんがいます。日本語が上手でコミュニケーションを取るのが容易なので、英語を話すことが苦手な私は大変助かっています。英語に限らず、言葉を操る能力には「読む」、「書く」、「聞きとる」、「話す」の大きく 4 つありますが、「話す」に関しては普段の日常生活の中に取り入れ、実践することを意識していないとなかなか身に付きません。近頃は、日本語で意思疎通ができることに

甘んじることなく、多言語でもコミュニケーションが取れるように努力していきたいと思い始めました。契機となったのは、「Kazu Languages」というYouTubeチャンネルを偶然見たことです。彼は5年で12ヶ国語を話せるようになったそうで、それはもちろんすごいことなのですが、私が特に印象的に映ったのは、英語ではなく、話し相手の母国語で話したときの相手のリアクションがとても嬉しそうだったことです。言語は障壁でもあるが、同時に心をグッと近づけるための手段であることを改めて感じた瞬間でした。

海外を身近な存在にするには、言語や文化が違う相手を尊重し敬う気持ちをもつことと、その相手にまずは一歩歩み寄る行動を示すことです。ナラーさんが卒業するまでには、簡単な日常会話を英語でもモンゴル語でもできるように努力してみようと思います。



令和4年度留学生研修旅行（金沢21世紀美術館 2022.10.29）

経験から得たもの

学生課長 田中 賢一

30年以上も前のことですが、私が福井大学に入職して最初に任された仕事が国際交流に関するイベントでした。福井大学は米国ラトガース大学と学術交流協定を締結しており、その交流事業の一環として、ラトガース大学大学院で教育学を専攻している学生が日本の教育制度を学ぶために直接日本の教育や文化、歴史、産業、風土などに触れてもらう体験型のセミナーを開催するものでした。

3週間にわたるプログラムは、福井だけでなく東京、名古屋、京都、大阪と様々な場所で実施し、小・中学校、高校、幼稚園、予備校などの訪問とディスカッションをメインに、大手自動車、電機メーカーや原子力発電所の見学、さらにホームステイや座禅、紙漉き、底引き網体験など実に盛りだくさんの内容でした。

さて、いざセミナーが始まり毎日20名の参加者を引き連れて歩くことになるのですが、参加者に日本語を話せる人は一人もおらず必然的に英語でコミュニケーションをとらなければなりません。私の貧しい英語力でどれだけ通用するのかわからず最初は躊躇していましたが、先方はお構いなしに英語で話しかけてきます。それでも辞書を片手になんとか聞いたり話したりしているうちに不思議にコミュニケーションがとれるようになり、音楽や文学の話など共通の話題で盛り上がることもありました。そのうちセミナーも終盤に差し掛かり、最後のカリキュラムは京都と大阪での視察、ほぼ観光です。大いに盛り上がり、最後の大阪での夜は気の合う仲間たちで飲み明かして感動の旅立ちとなりました。その後も彼らとは手紙やクリスマスカードなどしばらく交流が続いて、「今度はアメリカで会おう」という話もしていたのですがそれっきりとなってしまったことは心残りです。

私の国際交流といえる経験はこれくらいで、今ではこの時の英語力は跡形もなく消え失せてしまっています。しかし、この時の経験は私の考え方や物事の見方に大きな影響を与えるものであったと思います。自分とは異なる人種、民族、文化、宗教などに触れることは、多様性を重んじることの大切さを実感できるものでした。たった3週間でしたが、自分とは違うバックグラウンドを持った人々と密に接したことで、異なる価値観に対する尊重と共感を通して自分の考え方や視野が広がっていくことを感じました。

また、彼らと話していて日本のことを説明する機会が多くありました。彼らは日本の文化、歴史だけでなく政治、経済、社会制度に至るまであらゆることに興味を持っていました。国際交流を進めていくには、単に国外に目を向けるだけでなく自分の国を理解することも大切だと思います。留学生とチューターの皆さんには、ぜひお互いの国のことを大いに語り合って、多様な価値観に触れ合いながら素敵な経験をたくさん積んで自分の世界を広げてほしいと思います。

[チューター]

自身のチューターを振り返って

電気電子工学科5年 竹口 楓賀

私は、3年生から4年生の間マレーシアから留学にきたカルビンのチューターを務めていました。チューターになろうと思ったきっかけは、担任の先生に依頼されたためでした。当時は、国際交流には興味がなかったけれども依頼されたからにはやってみようという気持ちで引き受けました。私はチューターになって教えたことよりも学んだ事のほうが多いと感じました。

3年生の最初はコロナウイルスの関係もあり初めてカルビンと話したのはチームズのビデオ通話でした。ビデオ通話の当日、自分は英語があまり得意ではないし、全く会話が成立しなかったらどうしようということを考え緊張していました。しかし、これは杞憂でした。カルビンはとても流暢な日本語で話し、私の言葉もしっかりと理解してくれて緊張はすぐに解け、とても楽しい時間を過ごせました。話を聞いてみると、カルビンは4か国語話せるそうです。日本語がこれほど上手なのにあと3か国語も話せるのはすごいなと驚きました。また、カルビンは定期テストでも常に成績トップで私が教えてもらうことのほうが多く、「もうどっちがチューターなのかわからない」なんて冗談を周りから言われることもありました。2年間チューターをしていたのですが本当に、カルビンに教えたことよりもカルビンから学んだことのほうが100倍くらい多いと感じます。

そのほかにもチューターとしていろいろな体験をし、海外の文化を学ぶことができとても楽しかったです。卒業が近づき残りわずかな学校生活ですが最後までカルビンとの仲を深めより良いものとなるよう頑張りたいです。

留学生チューターになって

電子情報工学科5年 ☒ 大知

留学生チューターの経験は、私にとって大きな学びの機会となりました。私は、ラオスからの留学生であるイッキューくんのチューターを担当しました。彼はものすごく朗らかで、日本の文化や高専生活に強い関心を持っていました。

特に印象的だったのは、定期試験前の徹夜勉強の経験です。イッキューくんは、最初のうちは「そんなに遅くまで勉強するの？」と驚いていました。ラオスや日本語学校では、夜遅くまで勉強することはあまりなかったらしく、彼にとっては新鮮であったようです。しかし、試験

が近づくにつれ、徐々に深夜遅くまで勉強するようになりました。

深夜の談話室でコーヒー片手にノートを広げ、互いに問題を出し合いながら勉強しました。眠気に負けそうになると、「もう少しだけ頑張ろう！」と励まし合い、時には雑談を挟んで気分転換をしました。気づけば外が明るくなり始め、「徹夜かぁ」と笑い合ったこともありました。イッキューも徹夜で目の下にくまがでながながらも達成感に満ちた表情を見せていました。

イッキューくんとの日々は、ただのチューター活動を超え、互いに刺激を受け合う貴重な時間となりました。彼の視点を通じて、日本の学生生活を改めて見つめ直すことができ、私自身も大きく成長できたと感じています。



令和5年度留学生研修旅行（福井県立恐竜博物館 2023.11.18）

留学生のチューターを務めて

機械工学科4年 加固 泰志

私は3年次の4月から、マレーシアからの留学生であるディンカイ君のチューターを務めています。私がチューターを引き受けた理由は、担任の先生から依頼があったことと、英語力が向上することを期待したからです。

私がディンカイ君と初めて会ったとき、私は緊張のあまりほとんど話しかけることができませんでした。そんな私を見た彼は流暢な日本語で話しかけてくれたので、人見知りの私も会話を続けることができました。もしかしたらこの時、はずれのチューターをひいたと思われていたかもしれません。初めのうちは英語が話せないことからの不安で、本当にチューターとしてやっていけるのかと考えることもありましたが、一緒に寮でご飯を食べたり、勉強を教えてもらったりしていく中で、そのような考えは次第に消えていきました。勉強面ではサポートされっぱなしで、どちらがチューターかわからないような状態ですが、今後も頑張ろうと思います。

チューターになって既に一年半以上経ちました。当初期待していた英語力の向上は無かったです。留学生と関わるという貴重な機会を得られたこと、なによりディンカイ君と友達になることが出来て良かったです。卒業までの残り期間はあと一年ほどですが、今後も自分にできるサポートを頑張っていこうと思います。

チューターとしての楽しい日々

電子情報工学科4年 古川 大希

私がブヤ君と初めて出会ったのは、3年に進級したすぐの教室でした。彼はモンゴルからの留学生で、日本語がとても上手で、穏やかな性格の持ち主でした。寮生活が始まると、彼の優しさや面倒見の良さにすぐに気が付きました。困っている人がいればすぐに手を差し伸べ、みんなが心地よく過ごせるように気を配ってくれる、そんな存在でした。

学校では、授業の課題を一緒に取り組んだり、試験前に一緒に勉強しました。ブヤ君は数学が得意で、私が難しい問題に悩んでいると、「こう考えればわかりやすいよ」と優しく教えてくれました。そのおかげで、苦手だった分野もなんとか乗り越えることができました。また、休み時間には楽しく話したり、一緒に笑ったりすることも多く、彼のユーモアに何度も助けられました。些細な話題でも盛り上がり、気づけば授業が始まる直前まで話し込んでしまうこともありました。授業中もブヤ君との思い出がたくさんあります。特に体育の時間では、バスケ

で同じチームになり、お互いに声を掛け合いながら、他のチームを蹴散らしました。彼の運動神経の良さには驚かされましたし、一緒に走ったり、ゲームに参加したりする時間はとても楽しかったです。また、数学や専門の授業では難しい問題が出ると、お互いに考えながら答えを導き出し、理解が深まるのを実感しました。

ブヤ君はモンゴルの文化についてもよく話してくれました。モンゴルの広大な草原や星空、伝統的な料理の話など、彼の話聞くことで異文化への興味が深まりました。彼もまた、日本の生活に興味を持ち、文化の違いについて楽しそうに話していました。

寮生活や学校生活を共にする中で、ブヤ君と過ごした日々はかけがえのない思い出となりました。彼との出会いを通じて、異文化交流の大切さや、新しいことに挑戦する楽しさを改めて感じることができました。これからもお互いに成長しながら、素晴らしい経験を積んでいきたいと思います。

僕の友達

機械工学科3年 木谷 旺揮

僕は、今年度の春よりチューターとして留学生のお手伝いをしています。

僕が担当している留学生は、アリムという名前でマレーシア出身の留学生です。アリムと初めて会った時、アリムはまだ日本に来て間もない頃で、第一言目は、お前が俺のチューターか？と言われびっくりしたのを覚えています。そこからたくさん話すようになり、今では名前と呼んでくれています。

アリムはとてもユニークでいつもニコニコしていてコミュニケーション能力が同年代の日本人よりもとても高いなと感じています。アリムとの1番の思い出はテスト前の勉強です。毎回物理などの難しい教科はアリムに逆に教えてもらっています。前までは僕が日本語などを教える側でしたが、どんどん日本に慣れてきて今では立場が逆になってしまっていて毎日感謝しています。

チューターとなり少し大変だったのは、聞かれたことを教える時や僕がなにか言いたいことがある時もなかなか日本語で伝えるのが難しいということです。そういった時はジェスチャーを用いて伝えたり、携帯を使ったりしますが、1番多いのは英語を使って伝えることです。アリムも僕も母国語は英語ではないのに英語でコミュニケーションを取るのはとてもおもしろいなと思います。

今でも毎日一緒に学校へ行ったり、ペアワークなどでペアを組んだり、とても仲良くしています。これからも一緒に勉強し、仲のいい友達としてアリムのことをサポートし、高専生活を一緒に過ごしていけたらいいなと思います。

チューターになって

電子情報工学科3年 三村 龍輝

僕は三年生になると同時にインドネシアからの留学生エクセル君のチューターとなり、この一年間過ごしてきました。チューターを頼まれたのは二年生が終わり、春休みを過ごしていた時のことでした。どんな人のチューターになるのだろうかと心配していましたが三年生に進級して彼と過ごすうちにその不安は払しょくされました。慣れない環境で大変だとしても皆に丁寧に、優しく接する人柄や、それでも時に寮でカードキーを忘れて部屋のある棟に入れなくなったりと少しだけおっちょこちょいな面を見たりして彼と少しずつ仲良くなることができ、彼と会う前に少しだけ抱いていた不安がなくなっていました。

そして、その一方で彼がとても流暢に日本語を使っていて、普段生活する分には全く問題ないレベルで日本語を使いこなす姿に驚きました。しかも、彼の出身国のインドネシアは多様な言語が使われる国であり、彼自身もそのうちのいくつかを使うことができると話していたので、その言語能力の高さに驚きました。ただそれでも時々意味がわからない日本語があり、レポートなどで苦労している様子もありましたが、あきらめずにやり遂げようとする様子に感服すると同時に可能な限りのサポートを行おうと思いました。そしてそう思い彼のサポートをしているうちに気づいたことは、意外と普段から使っている言葉でも説明が難しく、うまく言葉の意味を伝えることの難しさです。また、違う意味で同じ言葉を使う言葉もあり、外国人にも伝わりやすい日本語を使うこと、これは日本人同士の意思疎通にも大きく役立つので、いわゆる「やさしい日本語」の大事さにも気づくことができました。

僕はこのチューターという役の経験はとても貴重かつ、言葉や他国文化を知るうえでとても良い経験だと考えます。今後も自分の後学のためにも、なにより彼の留学をより良いものに出来るようにサポートしていきたいです。

言葉を越えたつながり

物質工学科3年 小山 凜

私はこの1年間、マレーシアからきたアミラさんのチューターとして高専生活を過ごしてきました。チューターを引き受けた当初は、英語も上手に喋ることの出来ない私が務まるのかという少し不安な気持ちがありました。

しかし、アミラさんはとても落ち着いていて大人びた雰囲気があり、話しやすい方でした。最初は英語での会話に不安がありましたが、ジェスチャーや翻訳アプリを活用することで、意

思疎通がスムーズにできるようになりました。もちろん、簡単なことばかりではありませんでしたが、それもまた新鮮で楽しい経験でした。

また、アミラさんとの交流を通じて、日本とマレーシアの文化の違いを学ぶことができました。特に、イスラム教の習慣や考え方について教わったことは、自分にとってとても貴重な学びとなりました。普段の学校生活では知る機会の少ないことを直接聞いたことで、視野が広がったと感じます。

これからもチューターとしてアミラさんをサポートしながら、一緒に楽しい思い出をたくさん作っていきたいと思います。

チューターになって

環境都市工学科3年 角野 椿

私は今年始めてチューターという役割を経験しました。2年生のときまでは寮の中で同性の同級生がいなかったので、3Bの女子留学生が来ると聞いたときはすごく嬉しかったです。

私がチューターを担当しているナラーさんはモンゴル出身で、よく喋り、よく笑い、よく寝る明るい人で、いっしょにいてとても楽しいです。そんなナラーさんは寮やクラスの中でもすぐに馴染めていて、最近ではどこにいてもナラーさんの笑い声が聞こえるので、私は嬉しい気持ちとほっとした気持ちでいっぱいです。

ナラーさんとの思い出はたくさんありますが、特に印象に残っているのは私の誕生日にホールケーキをプレゼントしてくれたことです。2月はナラーさんの誕生日なので、私はナラーさんの好きなチーズケーキを手作りでプレゼントしたいと思っています。また11月の研修旅行では、ナラーさんとはじめて県外に出かけることができ、楽しかったです。

福井高専に来てもうすぐ1年がたつナラーさんですが、福井のような田舎ではなく都会の方が好きであったり、日本の食事はモンゴルの食事と比べて肉の量が少ないと言っていたりしているなど、まだ文化などの違いに少し戸惑っていることもあります。いまの環境に慣れてもらうために、また日本をより好きになってもらえるようにすることが、いまのわたしの役目だなと感じています。

これからもナラーさんといっしょに楽しい毎日を過ごしていきたいです。

[外国人留学生]

人生の4%

電気電子工学科5年 加ビンリン チン 莉

もし私の人生が75年続くとしたら、そのうちの3年間をここ、福井で過ごしたことになります。「たった4%」そう考えると短い時間かもしれませんが、この4%には、数え切れないほどの思い出と、いろいろな出会いが詰まっています。

日本に初めて来たときは、本当に素晴らしい気持ちでした。アニメで見たり聞いたりしていたものが現実になったようで、まるで夢のようでした。最初は日本語があまり話せなくて、すごく不安でした。そんな中でも、多くの日本人の友達が温かく受け入れてくれて、本当に感謝しています。

最初の頃は、日本語があまり理解できなかったこともあり、勉強はとても大変でした。日常の会話も難しく、よくボディランゲージを使ったり、翻訳アプリを使ったりしながら何とかコミュニケーションをとりました。それでも、周りの人たちは優しく対応してくれて、少しずつ日本語でのコミュニケーションにも慣れていきました。

また、学業ではわからないことがあったら、チューターに質問し、チューターはいつも優しく教えてくれました。時には帰省せずに指導してくれることもあり、そのおかげで少しずつ学業にも慣れていきました。

そして、3年経った今、先生方や学生課の職員の皆さん、そしてここで出会った友達と、とても親しくなったと感じています。福井高専に来て本当に良かったと思いました。色々な思い出ができていて、非常に感謝しています。

振り返ってみると、自分の人生の4%を福井で過ごしてよかったと思います。心から、ありがとうございます。

ラオスと日本の文化の違い

電子情報工学科5年 テブ カン 奴-ザ

日本に初めて来たとき、新型コロナウイルスの影響で二週間の隔離が必要でした。しかし、日本の対応は整っていて、留学生へのサポートも丁寧でした。最も驚いたのは、日本人の礼儀正しさです。コンビニで買い物をするだけでも、店員さんがとても丁寧に接してくれました。そのため、逆に自分が失礼にしているのではないかと感じることもありました。

日本の学校生活は、ラオスと大きく異なります。授業の間の休憩時間は日本では10分ですが、ラオスでは20分あり、その時間を使って友達とサッカーをしたり、ボードゲームをしたりします。特に運動する学生が多く、休憩後には汗だくになって教室に戻ります。自分もその一人でした。日本では、休憩時間はお菓子を食べたり、少し話したりする程度で、ラオスほど活発に動くことはあまりないように感じます。

食文化の違いも印象的でした。ラオス料理は甘い、辛い、酸っぱいなど、さまざまな味が組み合わさっています。特に辛さのレベルは日本とは比べものになりません。最初は寮の食事で満足していましたが、1年後にはラオス料理が恋しくなり、自分で料理をするようになりました。また、日本ではラーメンをすする音が美味しさを示すとされていますが、ラオスでは食事中に音を立てるのは失礼なので、最初は驚きました。

日本のルールや習慣にも驚くことがありました。例えば、日本では食事の前に「いただきます」、食後に「ごちそうさまでした」と言います。ラオスにも感謝の文化はありますが、声に出すのではなく心の中で祈るだけです。また、日本は土地が狭く、建物がコンパクトに作られています。さらに、選挙期間になると街中でスピーカーを使った選挙カーが走るのも、日本ならではの文化だと感じました。

日本の文化には素晴らしい点がたくさんあります。特に、伝統を大切にしながらも現代社会に適応しているところが魅力的です。日本の生活は次第に自分にとって居心地の良いものになっています。しかし、ラオスのお正月（ブン・ソクラーン）のように、水を掛け合いながら楽しく過ごす祭りは、日本では体験できないため、懐かしく思います。日本とラオスの違いを理解しながら、これからも学び続けていきたいです。

時間はあっという間に過ぎてしまう

環境都市工学科5年 コンシリ ウリナー

日本に来てから4年が経ち、福井高専に来てからも3年が過ぎました。3年前、初めて鯖江駅に着いたときの気持ちは、今でも鮮明に覚えています。「これから3年間、この町で過ごすんだな」と思いながら、少し不安と緊張を感じていました。その時は、3年間という期間がとても長く感じました。でも今、その3年間もあっという間に終わりに近づいていることに驚いています。

最初の頃、日本の生活に慣れるのはとても大変でした。日本語も上手に話せなかったし、文化や習慣も違って、毎日が新しい発見と挑戦の連続でした。でも、少しずつ日本語を話せるようになり、生活にも慣れてきたことで、少しずつ自信を持てるようになりました。

福井の町も、最初は静かすぎて少し寂しく感じましたが、今ではその静けさがとても落ち着く場所だと思うようになりました。授業では、専門的な知識や技術を学びながら、友達や先生と一緒に課題に取り組み、成長を感じることができました。

思い返すと、最初は日本の環境にとっても戸惑いましたが、少しずつその中で自分の居場所を見つけていったように思います。今では、日本での生活が私にとってとても大切なものになっています。これから3年間を終え、次のステップに進むことに少し不安もありますが、それ以上に楽しみや期待が大きいです。この経験を活かして、次の場所でも挑戦を続けていきたいと思っています。そして、福井高専で過ごした時間は、私の人生にとって大きな思い出となり、これからもずっと忘れない大切な思い出になるでしょう。

私の留学ストーリー

機械工学科4年 ファン デイカイ

私が初めて日本を知ったのは、ある動画をきっかけでした。その動画では、東京の街並みが紹介され、きらびやかな服を着た人々が東京の輝く街を歩いている様子が映し出されていました。それを見た瞬間、「いつか日本に行って勉強したい」と夢見るようになりました。

しかし、私の家庭は裕福ではなく、海外留学を実現する唯一の方法は政府からの奨学金を得ることでした。その希望を叶えるために、私は昼夜間わず勉強しました。「絶対に奨学金を取って日本に行くんだ」という思いで努力を続けた結果、全国で50人しか選ばれない日本留学奨学金を獲得することができました。その後、さらに1年間日本語を勉強し、ついに日本に来

る日を迎えました。日本に到着したときは、「これからどんな経験が待っているのだろう」と、心が踊りました。

日本でのクラス初日、私は拙い日本語で自己紹介をし、なぜ日本に来たのかを説明しました。その後、先生が1年間のスケジュールを説明し始めましたが、先生の話す日本語には福井弁が混じっており、ほとんど理解できませんでした。何とか知っている単語を拾い上げようと努力しましたが、説明が終わるころ、先生が突然「おいディンカイ、大丈夫やんけ？俺の言うこと、わかってるんけ？」と聞かれました。その瞬間、私は言葉を失い、ただ頷くだけでその場をやり過ごしました。

日本に来てから、言葉の壁にぶつかるたびに、自分の日本語力の未熟さを感じました。初めは授業中、先生が何を話しているのか、クラスメイトの会話の中で何が起きているのかもわからず、ただ笑ってその場をやり過ごすしかありませんでした。「伝わっていない」という感覚は、私にとってとても悔しいものでした。この悔しさが、さらに日本語を学ぶモチベーションとなったのです。

友達を作るためには、思い切ってクラスメイトに話しかける努力をしました。最初は緊張していましたが、「今日元気？」や「週末は何するの？」といった簡単な質問から始めました。話すたびに、新しい単語を知ることができ、少しずつ会話が楽しめるようになっていきました。

日本語を学ぶ中で、「お疲れ様」という言葉が私にとって最も印象的でした。授業が終わった後、クラスメイトたちが「お疲れ様」と言い合っているのを耳にして、私は「どうしてみんなそんなに疲れているのだろうか？」と不思議に思いました。「まだ午前中なのに、そんなに疲れたのかな？」と考えてしまったのです。その後、この言葉が単に疲労をねぎらうだけではなく、「頑張りを認め合う」という深い意味を持っていることを知りました。この一言が、どんなに疲れていても心を軽くしてくれるのです。数日後、私は勇気を出して友達に「お疲れ様です」と挨拶を試みました。すると、その友達は笑顔で「お疲れ様！」と返してくれたのです。その瞬間、自分がこの日本語の中に込められた文化と気持ちに少しだけ触れた気がしました。

ここまでたどり着くために、どれほど努力を積み重ねてきたかを振り返ると、自分自身を誇りに思います。しかし、これから続く道は、今まで以上に険しく、挑戦に満ちているように感じます。それでも、私は挑戦をやめるつもりはありません。未来は未知数ですが、どんな道を選んでも後悔のない人生を送りたいと思っています。困難が待ち受けていても、その全てが私を成長させる糧になると信じて、一歩ずつ進んでいこうと思います。

あみいくす – 経験を編む

電子情報工学科4年 ナツガドルジ ブヤヒシグ

日本に来て、私の世界は大きく広がった。新しい言語、新しい文化、新しい人々との出会い。すべてが新鮮で、すべてが挑戦だった。

最初に驚いたのは、日本の時間の正確さだった。電車は秒単位で動き、授業や約束の時間もきっちり守られる。私は「時間を守る」ことの大切さを身をもって学んだ。

食文化もまた、日本を特別にしている要素のひとつだ。特にラーメンにはすっかりハマってしまった。最初は「日本人はなぜこんなにラーメンが好きなんだろう？」と思っていたが、自分も気づけば週に何度も食べるようになっていた。ひどいときは2日連続で食べることもある。健康に悪いとわかっているのに、あの濃厚なスープともちもちの麺の誘惑には勝てない。特に深夜に食べるラーメンは最高だ。

そして、日本の人々の優しさに何度も助けられた。授業でわからないことがあっても、放課後に先生に質問すると、遅くまで丁寧に教えてくれた。特に堀井先生には、実験のレポートをまとめるときに何度も助けてもらった。事務の方々も、ビザや書類の手続きでわからないことを親切にサポートしてくれたし、クラスメートも授業の内容をわかりやすく説明してくれた。みんなのおかげで、勉強も生活も安心して続けることができた。

「あみいくす」——それは、異なる文化、異なる価値観、異なる経験を編み合わせること。日本での生活を通じて、私は自分の考え方を広げ、多くのことを学んだ。そして、この経験を未来へつなげていきたいと思う。

日本で見つけた自分

物質工学科4年 ジェリシグ アマラン

日本に留学することになるなんて、まったく思っていませんでした。初めて日本に来た日、すごくドキドキしました。飛行機の中で、日本での生活がどんな感じだろうと想像していました。でも、周りの人がみんな日本語を話していて、少し不安になりました。最初の数日間は新しい環境に慣れるのが大変でしたが、先輩たちが助けてくれたおかげで、寮生活もだいふ楽になりました。寮で初めて会った友達と一緒に過ごす時間は、心強くて楽しくて、少しずつ日本での生活が楽しみになりました。

クラスの日本人の友達はとても優しく、私はもともと内向的なのですが、時々向こうから話しかけてくれることもあって、すごく嬉しかったです。日本語がまだうまく話せなかった時

期もありましたが、そんな時でも友達は私のことを気にかけてくれ、すごく助けられました。それに、チューターの助けを借りて、クラスメートとも仲良くなることができました。みんなが勉強を教えてくれたり、一緒にご飯を食べたり、旅行に行ったりと、すごく楽しい時間を過ごしました。

日本ではたくさんの初めての経験をしました。例えば、初めて雪を見たときは本当に感動して、友達と一緒に雪遊びを楽しみました。寒さが予想以上に厳しく、最初は雪道を歩くのも大変でしたが、雪の美しさや楽しさを感じることができました。一方で、初めての地震はすごく怖かったけど、今では慣れて、地震が起こったときの対策もしっかり覚えめました。時々母国が恋しくなることもありますが、それでも、一人で知らない国に住んでいることに、自分が強くなったと感じ、少し誇りに思います。日本で過ごす時間が長くなるにつれて、不安やホームシックを乗り越え、少しずつ自立できるようになりました。

日本は、どんなに遠くにいてもずっと思い出に残る場所です。だからこそ、日本で勉強するチャンスをもたらえたことに、心から感謝しています！

高専での生活と成長

機械工学科 3年 マハド アリム マイシン ビン サム

皆さん、こんにちは。私はアリムです。マレーシアから来ました。日本に来てから、もうすぐ一年が経ちます。現在、福井高専で機械工学を学んでいます。

私は普段とても話し好きな性格ですが、日本語がまだ上手ではないため、高専に来たばかりの頃は少し静かになってしまいました。授業中に先生の話がうまく理解できなかったり、自分の考えを日本語で伝えるのが難しかったりして、最初はとても大変でした。しかし、少しずつ友達ができ、日本での生活にも慣れてきました。今では授業や日常会話で日本語を使う機会が増え、以前よりも自信を持って話せるようになりました。

また、日本の四季を楽しんでいます。マレーシアは一年中暑いので、春・夏・秋・冬の変化を感じられるのはとても新鮮です。特に紅葉や雪景色を見るのは初めての経験で、感動しました。食文化も興味深く、特に寿司や刺身が大好きになりました。新鮮な魚を食べる機会が増え、日本ならではの味を楽しんでいます。

日本での生活は挑戦の連続ですが、その中でたくさんの新しい経験ができています。これからも日本語をもっと上達させ、勉強も頑張りながら、充実した留学生活を送りたいと思います。

高専の印象

電子情報工学科3年 佐 功伸 ベルロ

今年は私の高専生活の最初の年です。たくさんの新しい人と出会えたことはとても楽しかったです。同じ興味を持っている友人もできて、毎日が新しい発見の連続でした。また、先生たちの教えが分かりやすく、学ぶことが楽しくなりました。

私は元々コンピューターや電子工学に興味があったのですが、高専に入ってから、それを深く学ぶ機会を得られました。ある科目では、実験を通して自分の目に見て学ぶことができたので、大変ではありましたが、とてもやりがいを感じました。そして、その経験が自分の能力向上に繋がっているのを実感しました。

また私は初めて大雪が降る環境に立ったことがあります。最初は天気がすごく美しく感動しました。しかし、大量の雪が降り続けると、移動が難しくなり、日常生活が大変になりました。歩くのも大変ですが、それでも冬の風景を満喫しています。これからも高専の生活をたのしんでいきます。

日本に来たばかりの不安と素晴らしい仲間たち

物質工学科3年 丸 友生 ジョウビンティ マド 妙乃

今年は日本に来たばかりなので、とても心配で、少し怖かった。新しい環境に適應できるか、日本の生活に慣れることができるか、そして友達を作ることができるか不安だった。日本語は勉強していたが、実際に日本で話すのは全く違う経験だと思った。クラスメートや周りの人とうまくコミュニケーションが取れるかいつも考えた。

しかし、そんな不安はすぐになくなった。3Cのクラスメートは本当に元気で、明るい人ばかりだった。最初の日から、彼らは私に話しかけてくれ、優しく接してくれた。日本語が少し不安だった私にも、簡単な言葉で話してくれたり、ジェスチャーを交えたりしてくれた。そのおかげで、少しずつ会話ができるようになる。クラスの雰囲気もとても良く、みんなが協力し合いながら学んでいる姿に感動した。

勉強の面でも、クラスメートの助けが本当にありがたかった。過去問を分けてくれたり、難しい問題の解き方を教えてくれたりした。特に化学工学の授業では、私はよく混乱していたが、クラスメートがよく説明してくれた。その優しさに、とても感謝している。お互いに勉強を教え合うことで、クラスの関係もさらに良くなっていった。

また、クラスメートだけでなく、留学生の関係もとても良い。みんな同じような不安からこそ、お互いに支え合いながら成長している。休日には、一緒に旅行をしたり、カラオケに行ったりして楽しい時間を過ごしている。異なる国から来た私たちが、日本という共通の場所で出会い、仲良くなれたことは、本当に素晴らしいことだと思う。

しかし、楽しい時間が続く中で、少し寂しいこともある。今年の5年生の先輩たちは、もうすぐ卒業してしまう。彼らは私たち留学生にとって、とても頼りになる存在だった。日本での生活や勉強について、いろいろなアドバイスをしてくれたし、一緒に遊びに行くことも多かった。その先輩たちがいなくなるのは、とても寂しい。でも、彼らが築いてくれたこの素晴らしいコミュニティを、私たちがこれからも良い関係を続けていきたいと思う。

2024 年の生活

環境都市工学科3年 ガンスフ ナントヤ

今年福井に初めてきて、去年いた東京と比べてちょっと田舎だなと感じていたときを覚えています。そのときは、まだここに慣れていなくて、成績についても悩んでいました。しかし、今見たら、もう1年間経って、慣れてきた気がします。ここまで多くの方が助けてくれたおかげだと思います。初めてきたときは、チューターがいて、住んでいる寮でも、学校でも一緒にいたため嬉しかったです。チューターの角野さんがいたから、クラスにも早く慣れてきたと考えます。毎朝一緒に学校へ行くから、一度も遅刻したことはなかった上、互いによく喋るから日本語の能力も成長したと思います。

また、10人の留学生もいて、一緒に福井の物事を体験していることが嬉しいです。そして、福井の方言などにも慣れてきて、今は前より楽になったと思います。そういうことから、後は進学するなら、都会より田舎の方もいいかなという思いを持つようになりました。

まだ後2年間もあるから、日本について、福井についてもっと知りたいと思っています。



令和6年度留学生研修旅行
(WATARIGLASS studio 2024.9.30)



留学生だより第 13 号

2025 年 2 月発行

福井工業高等専門学校